

身近な多文化共生

はじめに

在日外国人の児童が在籍したり、転校してきたりすることが増えているが、ベトナムやネパールなど出身国や性別、日本語を理解できるレベルも異なり、教師も児童もどのように接すれば良いか戸惑うことがある。4月にベトナムから転校してきた6年生の児童に対し、日本人の児童が親切心から過剰に関わろうとしたことで、ベトナム人児童は、慣れない日本での学校生活に戸惑いを覚えている様子も見受けられた。一方で、同じく4月にネパールから転校してきた5年生の児童は、日本人の児童同士がじゃれ合うように、国籍や言語に関係なく、他の児童とじゃれあったり、コミュニケーションを取ったりしている。今回のプログラムを通して、「日本語が分からない外国人だから〇〇しなければならない」「日本に住んでいるから〇〇すべき」といった固定概念をもつのではなく、お互いを尊重し、多様性を認めて共生していける社会を小さな頃から自然と築いていけるようになってほしい。

この教材の使い方・参加のルール

最初に、多くの日本人が海外に住んでいること、児童が暮らす地域にも外国人が多く住んでいることに注目する。そして、身近な存在である外国語指導助手の先生から、実際にあった話を聞くことで、日本でも在日外国人に対する差別や偏見が起きていることを知り、より身近な出来事として捉えられるようにしたい。

「あってもいい『ちがい』・あってはいけない『ちがい』・判断が難しい『ちがい』」で最初に扱う事例は、誰にとっても分かりやすく「あってはいけない」と感じるものを選び、その後に使うワークシートには、意見が分かれるようなもの、各自に葛藤が起きるようなものを選ぶことで、話し合いがより活発になると思われる。

全体のねらい

- ・ 自他の違いや文化や習慣の違いに気づき、正しく相手を知ること、肯定的に受け入れることができる。
- ・ 在日外国人たちの現状や課題を正しく理解し、同じ人間として多様な価値観を尊重し合うことができる。
- ・ 1つの答えを出すのではなく、人によって様々な考えがあることを理解し、お互いの意見を尊重できる。

●主な対象

小学校高学年～中学生

●用意するもの

- ・パワーポイント（P34）（導入クイズやワークシートの使い方を提示）
※ここに教師や外国語指導助手が体験したエピソードを入れると良い。
- ・個人作業用ワークシート（P37～38）：全員分
- ・「ちがい」カード（P35）：グループ分（予め切り離して4枚1セットにしておく）
- ・「ちがい」カードを置く用紙（P36）：グループ分

●所要時間

50分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. クイズ形式で「地域に住んでいる外国人の数」「海外に暮らす日本人の数」などを考える（パワーポイント参照）	身近に外国人が多く住んでいたり、海外にも日本人が多く住んでいたりすることに気づくようにする。
2. 日本に住んでいる外国語指導助手の体験談①～④を児童に読み聞かせる。（P33資料1参照）	身近な人から実際の体験談を聞くことで、より身近な出来事として捉えられるようにする。
3. ワークシートを全員に1枚ずつ配布し、①～④までの状況についてあってもいい「ちがい」、あってはいいけない「ちがい」、判断が難しい「ちがい」のどれかに○をつけ、その理由を記入する。	どうしてもその「ちがい」を選んだか、理由を大切にするように声を掛ける。
4. 4～5人のグループに分け、「ちがい」カードとカードを置く用紙を1セットずつ配布する。	
5. カード1枚ずつに対して各自が自分の意見を出し合いながら、グループで「あってもいい『ちがい』・あってはいいけない『ちがい』・判断が難しい『ちがい』」を考え、グループとしての意見をまとめて該当する枠にカードを置いていく。（この作業をカードの数だけ繰り返す）	自分と友達を選んだ「ちがい」の理由を話し合い、自分と異なる意見にも耳を傾けるよう促す。この時、多数決や正しい答えを見つけるのではなく、どうしてもその「ちがい」を選んだか、その理由を大切にしたり、自分と異なる意見に耳を傾けたりするように促す。

6. グループの意見を全体で共有する。 7. 教師が体験したエピソードを読み聞かせる（P33資料2）。あらかじめ、グループごとに進行役と記録係を決めておく。進行役は、グループのメンバーに、自分自身が日常の中で体験した「あってはいけない」と思う『ちがい』について話すよう促す。記録係はそこで出た体験談をワークシートの「3. 今までの経験を思い出してみよう。」の欄に記入する。 8. 進行役が中心となって、お互いの体験や考えを話し合い、グループで気づいたことを共有する。また、今後同じような場面に出会った時にどのように行動するかを話し合い、記録係はそこで出た意見を「4. 今日のふり返し」の欄に記入する。	日本人が海外に行ったときは、私たちも外国人となり、「ちがい」を経験することがあることに気付くようにする。 あってはいけないと思う『ちがい』に今後直面した時、自分ならどう行動するか、どうしたいかを共有し、解決法を考える。 日常生活の中での体験が思いつかない場合は、外国語指導助手の体験談をもとに話し合いをするようにする。 外国につながる子ども・当事者にとっては実体験のふり返りが辛いケースもあるため、参加者の状況に充分配慮する。
ふり返し 本時で学んだことや気づいたこと、今後の生活に生かしていきたいことについてふり返るようにする。	

●資料・解説

資料1：外国語指導助手の先生の話

- ①電車に乗っている時、満員で立っている人もいるのに、自分の周りの空いている席にはだれも座ろうとしなかった。
- ②お店やレストランで「外国人お断り」の表示を見かけることがあり、実際にあるレストランで食べようと思って入った時に、店員が英語を話せないからと断られた。
- ③アパートを借りたい時に、外国人だからという理由で断られた。
- ④口座の開設ができる銀行とそうでない銀行があり、困った。

資料2：教師の体験談（パワーポイント参照）

教師が海外に住んでいた時、友人たちと道を歩いていると自分に向かって道沿いの家の中から子どもがおもちゃのブロックを何個も投げてきた。一緒に歩いていた白人のフランス人の友人には投げないので、肌の色で差別を受けていると感じた。ただ歩いていただけなのに、このようなことをされ、ショックを受けた。しかし、フランス人の友人が、ブロックを投げた子どもに対して本気で叱ってくれる姿を見て、悲しい出来事であると同時に誰もが差別する訳ではないという温かい気持ちにもなった。

「ちがい」カード

※拡大コピーをするか、ウェブ上からダウンロードし、切り分けてカードにしてください。

あってもいい「ちがい」・あってはいけない「ちがい」・判断が難しい「ちがい」

例) 日本で同じ仕事の内容で、日本人の A さんのお給料は20万円、ブラジル人の B さんのお給料は10万円。 	①エジプト人の C さんは、宗教上の理由で授業中もスカーフ(ビジャブ)を着けているが、日本人の D さんは授業中はぼうしを脱ぐように先生に言われる。 	②ご飯を食べる時、日本人の E さんは食器を持ち上げて食べるが、韓国人の F さんは食器を持ち上げずに食べる。 
③日本人の G さんは毎日宿題をするが、中国から転校してきたばかりの H さんは宿題をしなくて良い。 	④日本では、小学校から英語の授業があるが、外国語の時間だけ英語で授業を受ける。ナミビアでは、小学校3年生までは母語で授業を受けることができるが、4年生からはすべての授業を英語で受けなければならない。 	

「ちがい」カードを置く用紙

※A3に拡大コピーしてください。

班のカード置き場

☆あってもいい「ちがい」

カード置き場

☆あってはいけない「ちがい」

カード置き場

☆判断が難しい「ちがい」

カード置き場

個人配布用ワークシート（両面印刷）

※拡大コピーをするか、ウェブ上からダウンロードしてください。

（表面）

（ ）年 （ ）組 （ ）番 名前（ ）

1. 自分の考えに近いものに○を書き↓、理由も考えてみましょう。

	1. あっても いい「ちが い」	2. あっては いけない 「ちがいがい」	3. 判断が 難しい「ち がいがい」	理由
①エジプト人の C さんは、宗教上の理由で授業中もスカーフ（ビジャブ）を着けているが、日本人の D さんは授業中はぼうしを脱ぐように先生に言われる。				
②ご飯を食べる時、日本人の E さんは食器を持ち上げて食べるが、韓国人の F さんは食器を持ち上げずに食べる。				
③日本人の G さんは毎日宿題をするが、中国から転校してきたばかりの H さんは宿題をしなくて良い。				
④日本では、小学校から英語の授業があるが、外国語の時間だけ英語で授業を受ける。ナミビアでは、小学校3年生までは母語で授業を受けることができるが、4年生からはすべての授業を英語で受けなければならない。				

(裏面)

2. 班の人とそれぞれ選んだ理由を話し合い、それぞれのカードをあってもいい「ちがい」・あってはいい「ちがい」・判断が難しい「ちがい」に分けましょう。

3. 今までの経験を思い出してみよう。

4. 今日のふり返し

おわりに

この教材を作るにあたり、私自身も知らないところで、日本に暮らす外国人が困っていることが色々あるのだと感じた。このような教材、授業を作る際には、一緒に働いている外国人指導助手の先生から実際にあった具体的な話を聞いてみると良いと思う。

参考文献・引用資料

- ・ 倉敷市データバンク 倉敷市の外国人登録人口について
<https://www.city.kurashiki.okayama.jp/2863.htm>
- ・ 外務省 海外在留邦人数調査統計
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html>

実践事例報告

プログラム作成・実践者

荒木亜紗子

学 校 名

倉敷市立万寿小学校

担当教科

外国語

実践教科

外国語・国際理解

単 元 名

「いろいろな『ちがい』を考えよう」

【児童の感想】

- ・コンビニに行った時に外国人がレジをしている列にはだれも並ばず、日本人がレジをしている列には行列ができていたので、良くないと思いました。
- ・自分はあまり差別を受けたことがないですが、今日話を聞いて、知らない内に自分も差別してしまっていたかもしれないと思いました。これからは、意識して生活したいです。
- ・日本人として日本で暮らしていると気付いてないけど、日本でも外国人への差別があり、外国の人は苦勞していることがドリーン先生（外国人指導助手の先生）の話から分かりました。
- ・今日の授業では、様々な場面を想定して話し合ってみて、自分と意見の違う人もいたので、それぞれ考え方が異なると感じた。もしも、自分がこのような場面に直面した時には、今日の内容を生かして、何も考えずに判断するのではなく、相手の理由や都合も考えて、状況に応じて判断することで、自分自身が「あってはいけないちがい」を起こさないようにしたいと思いました。
- ・身近な人たちでも考えは人それぞれでだと思います。今日の授業のような場面に出会ったら、自分の意見を押し付けず、お互いの考えや多様性を理解し合い、すべての人が公平にできるようにすることが一番大切だと改めて分かりました。



「ちがい」の考え方について例を基に意見を出している児童の様子



班でそれぞれの意見を出し合っている様子

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

ナミビアでの研修を活かして、ナミビアのことに多く触れた授業を作ろうと思っていたが、研修後のふりかえりの際、誰もが使える汎用性の高いアクティビティを作ってほしいと言われ、ナミビアでの経験をしていない人でも使えて、ナミビアでの学びが活かされるものを考えることに苦慮した。ナミビアでは、多様性を自然と受け入れ、共生している姿に感銘を受けたため、児童たちにも、今後成長していく中で、自分と異なる文化や考え方を排除しようとするのではなく、お互いに尊重し合ってほしいとの願いを込めて、「ちがいのちがい」の授業を行った。

また外国語の授業の一部として行う必要があり、教科書の単元と関連性をもたせることも容易ではな

かった。外国語の教科書に出てくる世界の文化や食事を学ぶ単元の最後に、今回の授業を行ったが、総合的な学習の時間や学活などで時間数を増やして取り扱っても良いと考えられる。

授業の準備をしている段階で、1時間でこの内容を網羅するには時間が十分ではないと感じ、準備した「ちがい」カードの数も減らしたが、実践発表したクラス以外で実際に授業を行うと、それでも時間が足りなかったため、最終的にはワークシートの④の内容は省いて行った。

外国人に対する差別や偏見について深く考えたことがない児童は、外国人指導助手の先生の体験談を聞き、日本でもこのようなことが起きているのだという事実に衝撃的を受けていた。単に様々な「ちがい」について考えるのではなく、身近な人の体験談を聞くことで、より活動への興味が高まり、異なる「ちがい」について考え、意見を共有する活動にも真剣に取り組む児童たちの姿が見られた。他方で、後半の児童自身のふり返りや、今後の解決策を考えたりグループで意見を共有して新たな気づきを得たりする部分に、もっと時間をかける必要性を感じた。児童の雰囲気や活動の様子によっても時間配分は変わってくると思うが、この授業を2時間に分けて行くと教師も焦らず、児童ももっと深く考え、意見を出し合えるのではないか、と感じた。

今回は外国語で「多文化共生」について取り扱ったが、同じ時期に各クラスの担任は道徳で同じような題材を扱っていた。様々な領域で、色々な人が継続的に取り組むことで、ナミビアのようにまずは身近な「多文化共生」を自然と受け入れられる子どもたちを育てていきたい。